

 書評

神庭重信, 黒木俊秀 編

現代うつ病の臨床

その多様な病態と自在な対処法

広瀬徹也

本書は第5回うつ病学会(福岡, 2008)の基調講演, シンポジウム, 教育講演, ワークショップ, ランチョンセミナーなどの記録を元に書き下ろした論文から成っている。これほど網羅的でありながら一本筋の通った明快な本も珍しい。大盛況であった学会の会長, 副会長である神庭重信, 黒木俊秀両先生の周到な企画編集の賜物であろう。

副題に「その多様な病態と自在な対処法」とつけられたように, 本書の中心は第Ⅱ部の「現代うつ病の諸相—その診断と治療」にあるといつてよいだろう。その導入にあたるのが第Ⅰ部の「現代社会におけるうつ病とは何か」であり, 締めくくりが第Ⅲ部の「現代うつ病の養生論」という三部構成になっている。

第Ⅱ部の中にも総論的な「うつ病像のゆくえ」(内海 健), 「現代のうつ病論—診断学的問題」(松浪克文), 「うつ病の文化・生物学的構成」(神庭重信)がまず置かれ, それに続いて「双極スペクトラムの多面的理解」(津田 均), 「“ディスチミア親和型うつ病”をとおしてみる現代うつ病医療」(松尾信一郎), 「非定型うつ病はうつ病か?」(坂元薫), 「パーソナリティ障害のうつ病」(小川豊昭), 「子どものうつ病」(村田豊久), 「発達障害のうつ病」(牛島洋景, 宇佐美政英, 齊藤万比古)「老年期のうつ病」(池田 学)など, 今日特に問題となっている病型が各論的に隈なく取り上げられている。

この中では, ディスチミア親和型うつ病の提唱者でありながら急逝した樽見に代わる, 同僚であった松尾の論考が注目される。この名称が最新のうつ病類型として急速に定着するとは樽見も予想しなかったであろう。診断よりも治療に軸足を置いて, 「自らの処方の意味を問いなおし, 精神療法の可能性を検討する」という流れこそが, 樽見が本来意図した流れに近いのではなかろうか」という松尾の主張に耳を傾けるべきであろう。そして, 彼らの本質を病者

役割(sick role)は放棄するが, 医療化は求める態度に見だし, 治療に際し, ‘体力’という言葉の有効性を説いた点は秀逸である。

第Ⅰ部は「うつ病の多様性と力動的理解」(西園昌久), 「“正常な悲哀”と“病的な絶望”の狭間で—うつ病と自殺の医療人類学」(北中淳子), 「東アジアにおけるうつ病医療事情」(新福尚隆)の3つの論文から成っている。いずれもこの本の特色を高める内容であるが, 西園の「うつ病は本来, 生物—心理—社会的視点で理解し予防すべきものである」と, 北中の「うつ病は“疾病であり, 性格であり, 生き方であり, 対人関係であり, 社会病理でもある”のだ」は, ほぼ同一の内容ゆえに, インパクトが倍化して心に刻まれる。

第Ⅲ部は「うつ病診療のための物語私案」(神田橋條治), 「物語を失ったうつ病研究への処方箋」(加藤忠史), 「うつ病の認知療法・マインドフルネス・森田療法」(中村 敬), 「対人関係療法」(水島広子)といった治療論から成る。神田橋が強調する治療に必須の‘物語’をめぐる, 司会を務めた生物学を代表する加藤との掛け合いがおもしろい。「今や逆に, “何でもかんでも脳の病気ではないし, 薬だけのめばよいというわけではない”と啓発しなければならぬところまで来てしまった」との加藤の嘆きは皮肉である。本書を通じて抗うつ薬のうつ病治療における評価は高くない。しかし, 加藤もいうように, 多くの抗うつ薬治療が共通して脳由来神経栄養因子(BDNF)を増加させる知見は薬物療法の確かな橋頭堡になりそうである。

Update な専門書でありながら大変読みやすい本書を, うつ病臨床に携わるすべての医療従事者に推奨する。

(神経研究所・晴和病院)

●A5 318頁 2009 定価3,990円(本体3,800円+税) 創元社